

# 卒業記念旅行

## 1. はじめに

5月20日、スカイツリーに登り、展望台から夜景を見ました。といっても“東京スカイツリー”ではありません。台北のランドマークとして人気の高い、高さ500mの“台北101”です。展望台への入場料は450元(約1,350円)です。高いですか？それでも大勢の人で賑わっていました。

4月に11年間続けた英会話教室の卒業式をやりました。その記念旅行で台北に行ってきました。英語圏に行く予定でしたが、日程の合う国の予約が取れなかったため、勝手知った台北にしました。

女性5人、男性2人の総勢7人です。男性は小生1人のため、安西君を誘い一緒に行ってもらいました。

翌21日は“金環日食”の日でした。日本では数ヶ月も前から大騒ぎでした。台北でも見る事が出来るということで、女性たちは観測メガネを持参しました。

朝6時に戸外に出て日食を待ちました。生憎くもり空で予定時刻になっても晴れ間が見えません。あきらめていたところ、雲間から太陽が顔を出しました。日食は後半に入っていて、残念ながら“金環”を見ることは出来ませんでした。それでも、その一部を“海外”で見ることができ、よい思い出になったと女性たちは大喜びでした。

今回は3泊4日のフリーツアーを選びました。すべてフリーなので、滞在中のプランは、小生の独断で決めさせてもらいました。羽田12:40発、台北松山空港15:05着の便を利用しました。このルートは実に便利です。空港からホテルまで、わずか20分足らずで行けます。



小生が駐在していた頃は、ここが国際空港でした。日本からの来訪者を出迎えによく通ったものです。内部はリニューアルされましたが、規模や周辺の風景は当時と変わりません。

両替のため茶芸店に立ち寄り、ひとくさりお茶の実演と講釈を聞いたため、ホテルに着いたのは5時頃になりました。それでも街を散策し、夕食の場所を探す時間は十分にあります。



## 2. 台北新故郷文化食堂

シャワーを浴びさっそく街に繰り出しました。MRTに乗って“台北101”を見た後、“台北新故郷文化食堂”に行き夕食を食べました。この食堂はオーナーが集めた昭和初期の映画のポスターやレコードジャケット、古い家具調度品が店内に展示されていて、レトロな雰囲気が”ウリ“になっています。



この店のもうひとつの特徴は料理と値段です。一人200元(600円)均一で、メニューはなく料理は店主にお任せです。食材の仕入れ具合で料理は毎日変わります。日本語は通じないので、この方式は日本人には好都合です。料理は台湾の家庭料理でした。味は値段相応でしたが、量は食べきれないほどたっぷりありました。まずはエコノミーの夕食からスタートです。

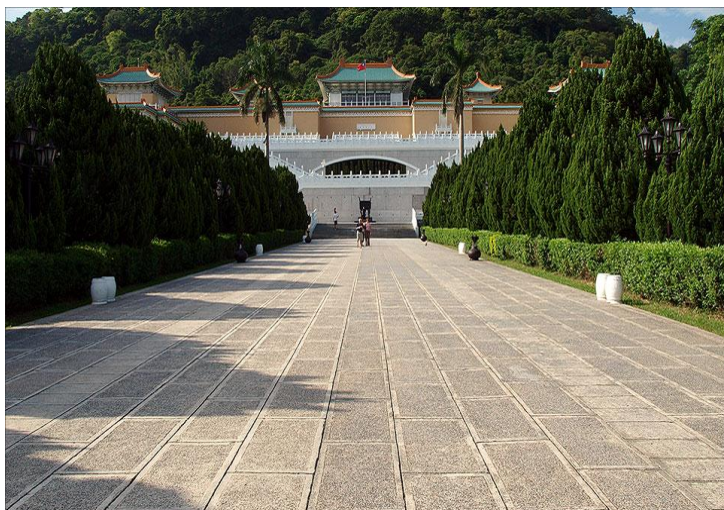
## 3. 台北市内観光

このツアーは基本的にフリーですが、旅行社が用意した無料と有料のオプションがあり、それを利用することができます。われわれは、2日目に無料の市内観光に参加しました。

その理由はクラスメイトの殆んどが、台湾が初めてだったからです。市内観光は忠烈祠や故宮博物院、中正紀念堂、行天宮、士林の夜市など定番のコースでした。このオプションがなければ、故宮博物院や士林の夜市には自前で行くつもりでした。



故宮は改築が終わり大勢の観光客でごった返していました。特に中国本土からの来観者が際立っていました。滞在時間が90分しかなかったため、ガイドによる“翡翠の白菜”や“瑪瑙の



豚の角煮”など目玉コレクションの説明に大半が取られ、お目当ての陶磁器コーナーは駆け足で見るとしかありませんでした。

“行天宮”は商売繁盛の神様です。金運に恵まれるよう、台湾式の長いお線香をボランティアの信者からもらって(もちろんタダで)祈願しました。霊験あればお礼参りに来ます。



その後“再春館健康中心”という足裏マッサージ店に案内されました。日本に同じ名前の製薬会社がありますが、まったく関係ないそうです。30分700円でマッサージしてもらいました。押される度に“痛い、痛い！”と悲鳴を上げているクラスメイトがいました。





このオプションには、ランチとディナーが付く“おまけ”がありました。ランチは台湾料理店として地元で人気の“丸林魯肉飯店”でした。1階はbuffetスタイルで、サラリーマンなどで賑わっていました。われわれはコース料理を食べました。



ディナーは小籠包で有名な“鼎泰豊”でした。小籠包はどこかで食べるつもりでしたので、この食事付きオプションは願ってもない内容でした。



#### 4. 北投温泉と淡水

3日目はオリジナルの観光に出掛けました。午前中は MRT で新北投に行き北投温泉博物館、梅庭、地熱谷などを巡り、瀧の湯や熱海大飯店、加賀屋などを見て回りました。



加賀屋は前回訪れた時は建設中でしたが、2年前にオープンしました。

加賀屋の売店を覗き、フロントでパンフレットをもらい、予約状況などを尋ねました。一番安い部屋が1泊6万円ですが、予約で満杯だそうです。誰が泊まるのか知りませんが、金持ちが多いのにはびっくりです。室内も食事もサービスもすべて純日本式です。仲居さんは着物姿です。日本式の木目細かいもてなしが受けているのかも知れません。

新北投での目的は温泉に入ることでした。“北投温泉親水公園”という公共の露天風呂があります。ここに入りました。男女混浴ですが水着着用です。湯船は3つあって温度が違います。



この露天風呂は、朝5時半から開業しますが、10時まではシニア（高齢者）が対象で無料です。一般客は10時半からの入浴となります。このことは知りませんでした。

たまたま立ち寄った“北投温泉博物館”の館長から説明を受けて知りました。この博物館も元々は公共の共同浴場でした。100年の歴史があり国の文化財に指定されています。昭和天皇が皇太子の時に訪れたそうです。

瓦葺き、赤レンガの外観は英国ビクトリア様式です。内部は畳敷きの大広間、男女別の浴場、



娯楽室や映写室など当時のまま保存されています。男風呂は、ローマ風呂を思わせる大きな浴槽



です。上下スライド式の木製の窓、ステンドグラス、欧風の照明器具など和洋折衷で大正ロマンが漂っています。ベランダから川のせせらぎが見えます。思わず強羅にあった旧保養所を思い出しました。

新北投から MRT で淡水に向いました。淡水は“台湾のベニス”と呼ばれる風光明媚な港町



です。夕陽が美しいことから若者のデートスポットになっています。かつてスペイン、ポルトガル、イギリスなど諸外国の統治下にあったため、建物やレストランなど西洋風の雰囲気が残っていて、台北とは違った異国情緒が味わえます。

淡水河に沿ってモダンなプロムナードが続いています。その内側に入ると、ローカル色豊かな



食堂や雑貨店、土産物店が軒を連ねています。昼食はおばさん1人で切り盛りしている小さな食堂に入り、淡水名物の“魚丸湯”と台湾そば、それにビーフンなどを食べました。ビールは置い

てないので、おばさんに断わり、近くのコンビニで買い、持ち込みで飲みました。

食後は、渡し船に乗って対岸の八里に渡りました。渡し船から眺める淡水の街は、高層マンションが林立し、赤レンガの洋館など、歴史的建造物とがマッチして、この街の発展ぶりを一望することができます。

それに対し、左岸の八里は素朴な漁村といった風情です。この発展の違いは MRT の開通と関係があります。MRT が淡水まで伸びたことで、淡水は都心への通勤圏になり、ベッドタウンとなり



ました。左岸には MRT がないため、マンションなど土地開発が遅れています。

八里には観音山という観音様の横顔に似た山があります。海鮮料理で有名な“余家孔雀蛤大王”に行くプランを考えましたが、昼食は淡水で済ませたので、“十三行博物館”を目指しました。

この博物館は先住民族の遺跡があった場所で、発掘された陶器や鉄器、墓などが展示されています。少数民族に関心のある安西君にぜひ見せたいと思っていました。

船着場から河口に沿って4Km のサイクリングロードが整備されています。小学校の子ども達が課外活動でサイクリングに来ていました。船着場の周辺には飲食店や土産物屋はありますが、そ



こを離れると人影がありません。

船着場で博物館の所在地を聞いたら、サイクリングロードに沿って行けば、10分ぐらいで辿り着くとのことでした。ところが10分過ぎてもそれらしい建物は現れません。一旦サイクリングロード



から離れ、民家の庭先にいた現地の人に尋ねたら、同じような答えが返ってきました。

再びサイクリングロードに戻り、10分ほど歩きましたが、依然として見つかりません。聞く人も見当たりません。木陰で休憩していたサイクリング中の白人夫婦がいたので、声を掛けました。彼等はドイツからの観光客で、博物館は知らないとのことでした。

炎天下でこれ以上歩くのは限界だと判断し、5分ほど歩いた後、Uターンすることにしました。結局、目的地に到達出来ないまま、船着場に引き返しました。多分、もう少しのところだったと思います。くたびれもうけで同行者には迷惑を掛けました。下調べが不十分だったと反省しています。

渡し船で淡水に戻り、観光スポットである“紅毛城”に行きました。淡水は元々漁村でしたが、貿易港としても栄えました。上流からの土砂によって海底が埋まり、やがて港の機能は失われました。

淡水は海からの玄関口だったことから、外敵の侵入を許すことになりました。先ずスペイン人が



上陸し、ここにサント・ドミンゴという城塞を築きました。それが紅毛城です。その後オランダ、イギリス、オーストラリア、アメリカなどの支配下に置かれ、現在は国の重要文化財(国家1級古跡)に指定されています。

館内にはその歴史を物語る品々が展示されています。その後方の丘には、私立真理大学があります。カナダ人の宣教師だったマッケイ博士が開校したケンブリッジカレッジが前身です。これも赤レンガの洋館で、この一帯が外国人居住地だったことが分ります。横浜の山手といった感じです。

紅毛城を最後に台北に戻りました。漁人碼頭で夕陽を見ることも考えていましたが、夕食の予約に間に合うよう切り上げて帰りました。これで今回の観光はすべておしまいです。





## 5. 江南春

最後の晚餐をどうするかが、思案のしどころでした。台湾は「在食台湾」といわれるように四大中華料理をはじめ、さまざまな料理を味わうことができます。値段もピンキリです。

家庭料理も大衆料理も台湾料理も食べました。残るは飲茶か高級中華料理です。ワゴンで運ばれて来る香港式飲茶も捨てがたいのですが、本来昼間食べる料理です。調べて見ると、24時間営業している飲茶レストランがあるのを発見しました。第1候補はそれにしました。

もうひとつの案は、せっかく台湾まで来たのだから、高級中華料理店で豪勢？に食べようという案でした。これもいろいろあって悩みましたが、野牛の会の50周年記念旅行で張さんにご招待いただいた“江南春”に絞りました。

会計係の安西君と相談し、飲み代を含めて1人1,000元の予算で“江南春”に行くことに決めました。前日フロントを通じて予約しました。淡水から戻り、シャワーを浴び、ちょっとドレスアップして出掛けました。

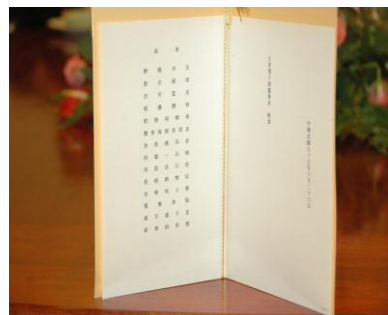
江南春のある福華大飯店は、MRTの忠孝復興駅から徒歩数分ですが、奮発してタクシー2台で行きました。この時間帯は退勤時間とぶつかっていたため、渋滞に巻き込まれ7時の予約に間に合うかひやひやしました。

さすがに人気店だけあって満席でした。チーフウエイテスガ、われわれの料理を書いたメニューを持参しました。

台湾の食通は“鮑の姿煮をとろみ味で”などと食材と味付け、調理法などをこまかに指定します。当方には、そんな高等戦術は持ち合わせてないのと、高級店にしては予算が少なかったため、すべてお任せにしました。



張さんにご接待いただいた時は、入口の看板に“日哥電子張薫事長 晚宴”という名前が表示され、立派な個室が用意され



ていました。メニューも張さんが予めオーダーした料理が印刷され、テーブルに置いてありました。今回の数倍の予算を掛ければ同じ待遇だったと思います。

それでも、高級上海料理に恥じないおいしい料理でした。チャーハンをレタスに包み手掴みで食べたのは初めてでした。台湾式に、陳年(熟成5年)の紹興酒に乾燥した梅干を入れて飲みました。女性方にも好評でした。

## 6. 帝后大飯店

今回宿泊したホテルは、徳恵街の“帝后大飯店(EMPRESS HOTEL)”でした。徳恵街と言ってもピンとこないと思いますが、中山北路3段の裏通りにあると言えば分り易いと思います。小生が駐在していた頃からある中級ホテルです。当時からビジネスマンが利用していました。



築40年以上の古いホテルですが、近年改装し室内はきれいでした。部屋も広く、泊まるだけなら十分です。大同電機製の液晶 TV があって NHK も見ることが出来ます。ダイレクトリーがなかったため、フロントや他の部屋の番号が分らず電話が出来ませんでした。

ロビーや食堂は狭く、団体客の宿泊はムリでしょう。フロントには、日本語と英語が通じるスタッフがいます。静かな環境なのになによりです。私立の大同大学が目の前にあります。MRT の圓山駅には徒歩5分(実際は7~8分)で行けます。交通至便とまでは言えませんが、不便ではありません。



中山北路は南京東路と並ぶ台北のメインストリートです。かつては“台湾の銀座通り”と呼ばれていました。その中心は中山北路2段で、国賓大飯店などの高級ホテルやブランドショップが並んでいます。われわれが泊まった帝后大飯店は、同じ中山北路でも3段ですので、銀座通りの外れといった感

じで、華やかさはありません。

ましてや実際の所在地は、メインストリート沿いではなく、裏通りにあるので、初めての人には、ここが銀座通りの一角とは思えなかったようです。周辺には昔ながらの古いアパート群が残っています。住民が日常利用する市場や屋台街などもあって、生活感があります。

初日に“台北101”に行くため、周囲の様子を見ながら圓山駅まで歩いたクラスメイトは、台北は東京と同じ大都会だと思っていたが、どうもそれは違うようだと言っていました。小生は、これから渋谷、新宿に行くので、その印象は変わるだろうと答えました。



台北の中心地は、中山北路から台北101のある忠孝東路や仁愛路に移っています。これらの地域はかつて文教地域でしたが、近年副都心として大発展しました。そごうや三越(いずれも現地



と合併)などのデパートや最高級ホテル、世界のブランドショップなどが進出し、一大繁華街に変貌しました。江南春のある福華大飯店も最高級ホテルです。これらを見て、台北が東京と変わらない大都会だと納得してもらいました。

## 7. MRT と TAXI

台北は MRT(Mass Rapid Transit) が縦横に走っています。山手線なみの間隔で運行されています。時間が正確で快適です。料金も安いので旅行者には利用価値の高い交通機関です。圓山から新北投までは約35分ですが、料金は35元(105円)です。この距離は京急で堀の内から横浜までに相当します。料金は410円ですから、如何に安いかが分ります。乗車券は自動販売機で購入します。最初は戸惑いますがすぐ慣れます。キップの代わりに“トークン”というプラスチックのコインを使います。一日乗車券もありますが、今回は利用しませんでした。



台北駅は東京駅です。MRT だけでなく新幹線や在来線が乗り入れています。MRT は便利ですが、台北駅は広いので乗り換えは“お上りさん”には大変です。構内の案内をする駅員がところどころに立っています。流暢な英語を話します。外国人の利用客が多いからでしょう。

MRTにTAXI を組み合わせれば、各地への移動はばっちりです。料金はメーター制ですから安心です。車もきれいです。ただし、通勤時間帯は混雑が激しいので、TAXI は避けた方がよいでしょう。運ちゃんはかなりスピードを出します。日本語はまず通じませんので、行き先を書いて見せるようにした方がよいでしょう。

われわれは繁華街(副都心)に行く時は MRT を使い、帰りは TAXI を利用しました。ホテルは逆方向になるので、渋滞に遭いません。料金も150元程度です。3人で乗れば1人50元(150円)です。



## 8. プロフィール

最後に、安西君と小生を除いた同行者のプロフィールをアルファベット順で紹介합니다。年齢は不詳ですが、いずれも小生より若いご婦人方です。

### ○ 鎌倉多恵子さん(左から2人目)

旅行好きで、毎年何度も海外に出掛けています。馬の愛好家です。リタイアしたサラブレッドの世話をしています。北海道にも頻繁に行っています。映画も趣味です。ボランティアとして、高齢者の介護に携わっています。今回もその仕事の都合で、1日早く帰国しました。

○ 轡田琴江さん(右から3人目)

趣味はゴルフです。ご夫婦で各地を転戦しています。松山空港でナイキの帽子を買いました。ご主人は京浜急行にお勤めです。今回、羽田までの乗車時間について、情報を提供していただきました。偏食家を自認していますが、今回の旅でかなり克服したようです。



○ 新見絹代さん(中央)

現役時代は銀行にお勤めでした。ガーデニングが趣味です。数年前に新築したすてきな家に住んでいます。観劇やコンサートにもよく出掛けています。ヨン様と巨人の大ファンです。楚々としてエレガントな女性です。

○ 武田登志子さん(右から2人目)

書道は免許皆伝の腕前です。ダンスの名手でもあります。静と動、和洋の文化に秀でています。海外旅行にもよく行きます。大胆不敵な行動で周囲をびっくりさせます。故宮で書や硯、墨などを観る時間があつたのかは確認していません。

○ 渡辺順子さん(右端)

水泳に励んでいます。体幹を鍛えているせいか、背筋が真っ直ぐに伸び、姿勢がきれいです。耐久力抜群で、今回の旅行中も常に先頭を歩いていました。愉快なお孫さんを描写したユニークなエッセイで、しばしば先生から誉められました。手作りクッキーも得意です。

今回も駆け足の旅でした。行きたいところ、やりたいことが十分に出来ず、期待に応えられたか心配です。私自身は大いに楽しみました。これも気心の知れたクラスメイトのお蔭です。よい卒業記念になりました。

謝々